

# 「Let's create our future ～身近なことから始めませんか～」 を合言葉に

学校教育における普及・啓発

伝統

地産地消

リサイクル

環境資源の保全

## 徳島県立城西高等学校

所在地：徳島県徳島市鮎喰町2-1

沿革：明治37年4月30日に、徳島県立農業学校として創立、開校

学科：総合学科、農業科4科(生産技術科、植物活用科、食品科学科、アグリビジネス科)

生徒数：1年 183名/2年 170名/3年 143名  
合計 496名(平成29年4月1日現在)

平成29年度「Go!Go!エシカル」わくわく徳島プロジェクト「エシカル消費」リーディングスクール事業のリーディングスクール2校のうちの1校

### ○事業・活動の概要

徳島県立城西高校では、農業科と総合学科を設置している専門高校という特色をいかして、徳島県産の食材のみを使用した地産地消の料理の研究や、伝統的な産業である藍染めの商品開発など、消費者の視点と共に生産者の視点を含めて様々な取組を行っている。

### ○四国遍路の札所からエシカル消費を発信

徳島県には「阿波和三盆糖」という伝統的な砂糖があるが、原料となる竹糖の生産量減少、後継者不足といった問題を抱えている。阿波和三盆糖の現状を知り、伝統を次代へつないでいこうと、阿波和三盆糖を用いた焼き菓子を開発した。

四国八十八カ所巡礼のお遍路さんをもてなす「お接待」の文化を大切にしようと、同校では、徳島市や鳴門市、阿波市などの札所において「お接待」を行い、その際、エシカル消費に関するパンフレットと阿波和三盆糖のお菓子を一緒に配付している。平成28年7月には英語版のパンフレットを作成し、外国人のお遍路さんにもエシカル消費を知ってもらう取組を行っている。



### ○農業科の特色をいかしたエシカル消費の推進

徳島県は、古くから藍染めの染料である<sup>すくも</sup>染作りが盛んで、江戸末期から明治にかけて藍染めの最盛期を迎えた。大正期には、化学染料の普及などによって衰退したが、伝統的な藍作りは今も受け継がれている。

同校では、平成22年度から、藍の栽培、染料の生産、染め付け、商品販売という阿波藍の6次産業化に取り組んでいる。全てを天然素材にこだわることで、生地が強くなり、防菌・防虫・防臭などの効能が期待できるほか、化学染料では出せない深い色合いを表現できる本藍染めを継承している。



また、毎年、田植えの時期には、同校の水田に近隣の小学校の児童を招き、水田に生息する生物の観察会を行っている。米を食べるという消費行動が、水田を守ることにつながり、水田を守ることが生物のすみかを守ることにつながる。生態系の循環の重要性を伝えることで持続可能な社会の形成に向けた行動に結び付ける狙いがある。

ほかにも、徳島県で古くから栽培され、現在は絶滅が危惧されている「<sup>みまら</sup>美馬太きゅうり」を活用し、近隣の幼稚園・小学校の子供たちを招いて試食会を開催することで、伝統的な野菜の継承と地産地消に取り組んでいる。

このように、これらの教育資源をエシカル消費の推進に結び付け、農業科の特色をいかし、様々な取組を行っている。



## ○総合学科の特色をいかしたエシカル消費の推進

多くの「学校設定科目」(地域や学校の実態等に応じ、特色ある教育課程を編成することができるよう、各学校が独自に名称、目標、内容、単位数等を定めるもの。)を開講している総合学科では、「産業社会と人間」、「絵本の世界」、「地理演習」などの科目において、様々な取組を行っている。

「産業社会と人間」では、世界との関わりを理解する活動として、子供服の回収活動に取り組んでいる。校内の農産物販売所や近隣幼稚園に回収ボックスを設置し、まだ着ることのできる子供服を集めた。平成29年度は、1,229枚、147kgの服が集まった。回収ボックスに集められた服は、大手アパレル企業を介して、難民など世界中で服を必要としている人々に届けられている。

「絵本の世界」では、エシカル消費をテーマにした絵本や紙芝居を製作し、徳島市内の小学校で読み聞かせを行い、幼少期からのエシカル消費の普及・啓発活動に取り組んでいる。紙芝居の製作に当たっては、徳島県消費者情報センターの職員を講師に招き、エシカル消費に関する理解を深め、木杵作りに徳島県立徳島科学技術高等学校の協力を得た。

「地理演習」では、エシカル消費に関する学習の中で、綿花の栽培には環境や人体に有害な農薬が多量に使用されていることが多いことを知り、農業科の協力を得ながら、自分たちで無農薬の綿花栽培に取り組んだ。



## ○他の団体との交流

前述した四国遍路の外国人や生物観察の小学生以外にも、地産地消への理解を深めるために、出荷されなかった農作物の提供を地元の農家から受けて調理実習を行っている。また、特定非営利活動法人与くしま障害者授産支援協議会の会員施設の利用者に、藍の栽培技術などをいかした支援を行っている。

このように、エシカル消費に関連する活動の中で、生徒が地域の団体等と交流することで、初対面の相手に対して自発的に話しかけられるようになるなど、生徒が成長するための有益な機会となっている。

## ○課題と今後の目標

今後も、これまでの活動をベースとして、地産地消の取組、もの作り、藍染めなど伝統文化の継承などに引き続き取り組んでいく予定である。

「エシカル消費」という言葉の認知度自体はまだ低いですが、エシカル消費につながる行動、例えばマイバッグ持参、3R推奨などの行動を実際に行っている人は多い。「これもエシカルだったんだ!」と気付いてもらえるように、自分の行動とエシカル消費の考え方をつなげる活動を進めていきたい。小さな子供からお年寄りまで、一人一人が取り組めるよう、「Let's create our future ~身近なことから始めませんか~」を合言葉に地域の人々にこれからも働き掛けていきたいと考えている。

公表日:平成30年7月12日 取材:平成30年1月

外部リンク:<http://josei-hs.tokushima-ec.ed.jp/>

